

部活動を通して学んだこと

御津中・3

「中学校二年半の自分の部活動への取り組みについてどう思いますか。」という質問をされたら、私は、「二年半真剣に頑張ってきたとはいえませんが、半年間は真剣に頑張ってきました。」と答えます。

なぜなら、私が真剣に部活動に取り組んだ期間は三年生になった春から引退する夏までの約半年間からです。正直なところ、一年生の時とときの仮入部から二年生の冬までの二年間を真剣に取り組んできたとはいえませんが、とはいえ、その二年間は部活をさぼっていた訳でもありません。ただ私は、「さぼりはしないけれど、特別頑張りもしない」姿勢で部活に取り組んでいました。

一年生のときに、私は弓道部を選びました。選んだ理由は、「かっこいい。」「あんな風にうってみたい。」という、とても単純なものでした。特に、「絶対弓道部に入りたい。」という強い意志がなかったのも、向上心のない姿勢につながっていたのかもしれない。

仮入部から入部、入部から一年と時間が経過するとともに、特別頑張ることなく、ですがさぼらず部活に来ていたこともあり、少しずつ的中数が上がってきました。もともと、二年生の夏以降に的中数が上がっていったのは、練習量が増えたことが大きな要因だと思います。去年は一日一時間半だった練習が四時間になり、二倍以上にまで増加しました。また、信夫道場や、岡崎、刈谷などへの出稽古も上達する機会になったと思います。的中数が上がったことで、自信がつき、「もつとあたるようになっていたい。」と思うこともありましたが、「そのために練習量を増やそう」などと、行動に移すことはありませんでした。

このように、大して努力を行わず、熱意もなく部活動に取り組んでいた私ですが、その姿勢が変わる、きっかけが訪れました。

弓道部は、端的に説明すると、上手な人から順番に、Aチーム、Bチームへと配属されます。春の大会に出場するチーム発表の際私は初めてAチームに配属されました。ですが、嬉しさよりも、「大会であたらなくて、チームメイトの足を引っ張ってしまったら嫌だな」「練習でもあたらなくて士気を下げることになったらどうしよう」という不安のほうが大きかったです。そのため、チームメイトに迷惑をかけたくないという一心で熱心に練習に取り組むことを決めました。部活がないときは家でゴム弓（弓道の動作を練習できるアイテム）をひいたり、御津体育館の弓道場に練習をしに行ったりしました。そのかいがあつてか、大会が近づくにつれて的中数も上がっていました。今になって振り返ってみると、このころの的中数が市場の勝つたように思います。初めて皆中（四本中四本あたるなど、うった本数だけあたること）を達成したのもこの頃でした。

大会前日の練習は、実際に明日大会が行われる会場で行いました。結果はチーム全体としてかなり良く、「明日もこのままいけば大丈夫」という安心感がありました。

そして迎えた大会当日、一立目（一回戦目と似た意味。一立で一人四本、チームで十二本うてる）の結果は、二立目にたくさんあてなければというプレッシャーのかかる厳しい本数で、「次こそは」と挑んだ二立目も思うような的中を出すことができず、県大会への出場権をぎりぎり手にできることを祈っていました。最終的に、県大会への出場権を得、次の大会に進むことができましたが、悔しさが残る結果となりました。私も、チームメイトの二人も、「県大会こそは」と意気込んで日々の練習や自主練習に取り組みましたが、県大会では予選で敗れてしまい、春の大会が終わりました。その後、五月に行われた砥鹿神社奉納大会では一本足りずで予選敗退、次の大会はいよいよ引退がかかった夏の市内大会でした。

夏の市内大会では、私はBチームに所属しました。弓道のチーム射では、最初にうつ人から順番に「大前」「中」「落」というポジションがあるのですが、私は「落」でした。もちろんどこも責任がありませんが、「落」はとくに前の二人があてたら続いてあてて。二人がはずしたらあてて、あたらない流れを止める。といったより責任のあるポジションなので、「二人が安心して後をまかせられるように頑張ろう。」と意気込みました。

市内大会に向けて、日々の部活動、自主練習により一層熱をあげて取り組みました。平日の部活動では、帰りの会が終わったら急いで制服をぬいで、速足で階段を下り、時間の許すぎりまで弓をひいていました。そのため、たいてい下校時刻が最終下校時刻ぎりぎり、走って駐輪場や門まで向かっていました。自主練習では、御津体育館の弓道場に行く頻度が増え、ゴム弓はほとんど毎日ひいていました。私の頭の中はほぼ弓道一色で、修学旅行の荷物を準備しているとき、ゴム弓を持っていくのかと本気で悩んだほどでした。こんなに熱をあげて不活動に取り組んだことは今までありませんでした。きっと、一年前の自分が見たら、驚くだろうし、何のために頑張るのか理解できないと思います。一年で、部活に向き合う姿勢が変わりました。特に市内大会に向けては本気になりました。

私には、大会での目標がありました。それは、自分達のチームで規定の本数である三十六射十五中を超え、東三大会への出場権を得ることでした。弓道の東三大会は、各校男女一チームずつの枠が必ずありますが、その枠に入れるのは基本的に一チームです。また出場チームに限りはないため、端的に言えば、規定の本数をこえれば何チームでも出場できます。そのため、十五中をこえ、出場権を手に入れる必要がありました。

大会での結果は、私は予選で一本、チームの二人が九本の具尾計十本で、予選通過本数の七本をこえて予選通過しました。ほとんど二人の力で予選通過、決勝進出がきまったことに、ふがない気持ち

ちでいっぱいでした。私が確実に足を引っ張っているという事実が、どうしようもなく苦しかったです。ですが、決勝の本数を含めた合計で東三の出場が決まるため、決勝では絶対あてようと意気込んで臨みました。

決勝の結果は、私はゼロ中、チームでの合計は十二本で、東三の出場権を得ることができませんでした。私はとても恥ずかしくなりました。「叶わない夢うい語っていた自分」にはありません。なぜなら「東三出場」は夢ではなく、普段通りあてられていれば手が届いた現実だからです。もつと言うのであれば、チームの二人はチームとして十五中以上するために一人五中以上を達成していました。あとは私があてるだけで、予選でも、決勝でも全体を通して私が足を引っ張りました。

そのときはもちろんですが、今思い返しても本当に悔しいです。私の人生の出来事の中で、一番悔しいといっても過言ではありません。そもそも私は、「努力すること」がとても苦手です。悔しさは頑張ったからこそ味わうもので、私は頑張っていないかったので、悔しさを感じることは今までにほとんどありませんでした。ですが、「弓道部」という部活動を通して「悔しさ」を学びました。半年間という短い時間でしたが、「頑張ること」ができました。きっと学んだ「悔しさ」は部活動以外でも、糧になるだろうし、むしろ糧にしてこれからの日々を生かしていきたいです。